

第2回

海洋文学大賞受賞作品集

小説・ノンフィクション部門

童話部門



本書は、日本財団の補助金を受けて作製したものを増刷し、頒布するものです。

第2回海洋文学大賞受賞作品集

平成10年(1998年)8月1日印刷

平成10年(1998年)8月10日発行

本体 905 円 + 税

表紙 = 生駒優季

発行所 = 財団法人 日本海事広報協会

〒104-0033 東京都中央区新川 1-23-17

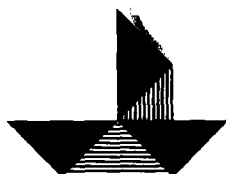
電話 03-3552-5034 Fax 03-3553-6580

印刷 = (株)タイヨーグラフィック

第2回

海洋文学大賞 受賞作品集

—小説・ノンフィクション部門、童話部門—



海の日

7月20日

はじめに

七月二十日の祝日「海の日」は、海の恩恵に感謝するとともに、海洋国日本の繁栄を願う日です。海事思想の普及を行うことを目的とする当協会におきましては、これを記念して海や船などをテーマにした、いわゆる海洋文学作品を全国から募り、海洋文学の奨励と発展を通じて、文学の面から人々に海に対する関心と興味を高めていただければと、「海洋文学大賞」を実施しておりますが、このたびの選考委員会において、第二回海洋文学大賞が決定し、ここに受賞作品を発表する運びになりました。また、本年度から新たに創設いたしました海洋文学のジャンルにおける著作活動において顕著なご活躍をされている作家を顕彰する同賞特別賞につきましても受賞者が決定いたしました。

これらを通じて、一人でも多くの国民の皆様は、七月二十日の「海の日」が単なる休日としてではなく、改めて海の大切さを見つめなおしていただける、有意義な祝日になりますようお願いいたします。

おわりにあたり本事業の実施に際し、ご指導を賜りました十川信介学習院大学教授、ならびに曾野綾子選考委員長をはじめとする各選考委員の先生方、ご後援いただきました関係官庁等の皆様方、又物心両面のご協賛をいただきました日本財団等の関係団体の皆様方に深く感謝申し上げます。

なお、大賞の贈賞式は、七月二十四日に、船の科学館（東京都品川区）において開催し、その記念パーティーには、紀宮殿下のご台臨を賜りました。

平成十年七月吉日

財団法人 日本海事広報協会
会 長 永 井 典 彦

第二回海洋文学大賞受賞作品集 目次

第二回海洋文学大賞の募集と選考について 6

第二回海洋文学大賞の選考を終えて 曾野綾子選考委員長 9

第二回海洋文学大賞小説・ノンフィクション部門大賞『長い一日』 11

第二回海洋文学大賞小説・ノンフィクション部門佳作『海人万華鏡』 45

同

『照洋丸新聞』 71

同

『底荷』 103

第二回海洋文学大賞童話部門大賞『太良の海の青い風』 131

第二回海洋文学大賞童話部門佳作『海王丸の航海』 149

同

『おじいちゃんの家』 161

同

『二階は海のそこ』

173

海洋文学大賞特別賞Ⅱ白石一郎

182

海洋文学大賞特別賞推薦のことば

183

第二回海洋文学大賞小説・ノンフィクション部門選評

185

北方 謙三委員

185

谷 恒生委員

185

十川 信介委員

186

第二回海洋文学大賞童話部門選評

187

十川 信介委員

187

木暮 正夫委員

187

遠藤 寛子委員

188

さくらともこ委員

188

第二回海洋文学大賞の募集と選考について

第二回海洋文学大賞は、平成九年七月二十日「海の日」から平成十年二月二十八日までの間、公募を行った。作品募集の周知は、運輸省記者クラブなど報道関係向け記者発表を行ったほか、マスコミ各社の媒体、海事関係団体の会報などにより応募要領を周知するとともに、主な図書館や博物館などの文化施設のほか、運輸関係施設で募集ポスターの掲示を行ったり、各種のイベント会場でチラシの配布などを行った。

応募作品は、総数五百二十一点で、その内訳は、小説・ノンフィクション部門二百二十七点、童話部門二百九十四点であった。

応募者は、日本全国はもとより、アメリカ、フランス、イギリス、カナダ、台湾の在住日本人のほか、在日カナダ人からの応募もあった。また、応募者の年齢の幅も広く、童話部門では十二歳の小学生をはじめ、両部門とも中学生、高校生から多数の応募があった一方、七十歳、八十歳代の応募も多く、最高齢は小説・ノンフィクション部門の八十六歳だった。

締め切り後、両部門の応募作品について、ただちに粗読み選考をすすめ、引き続いて予備選考委員会において、小説・ノンフィクション部門は四月二十七日、童話部門は五月八日にそれぞれ候補作品

を決定、本選考委員に送付し審査をお願いした。

本選考委員会は、小説・ノンフィクション部門は六月一日、童話部門は六月九日に開催し、両部門の大賞及び佳作作品三点を決定した。

また、本年度より海洋文学のジャンル（小説・ノンフィクションの分野）における著作活動において顕著な活躍をされ、すぐれた作品を発表された作家を顕彰することで、一般国民に対して海や船への興味を喚起することを目的として創設した海洋文学大賞特別賞については、四月から五月中旬にかけて出版社、新聞社等で文芸関係に携わる方々を中心に候補作家の推薦をお願いし、その結果をもとに、選考委員に諮った上で、六月十五日に受賞者を決定した。

マスコミ、報道機関への発表は、六月二十二日に行った。

なお、大賞及び特別賞の贈賞式は、七月二十四日に、船の科学館（東京都品川区）において開催し、その記念パーティーには、紀宮殿下のご台臨を賜った。

第二回海洋文学大賞の入賞作品

【小説・ノンフィクション部門】

大賞 小説『長い一日』大岩尚志（新潟県新潟市）

佳作 ノンフィクション『海人万華鏡』あん・まくどなるど（宮城県仙台市）

佳作 ノンフィクション 『照洋丸新聞』 佐伯友子（神奈川県湯河原町）

佳作 小説『底荷』 斉藤洋大（本名 斉藤勝、愛知県春日井市）

【童話部門】

大賞 『太良たたらの海の青い風』 本明紅（本名 小西紅、沖縄県竹富町）

佳作 『海王丸の航海』 吉村健二（埼玉県狭山市）

佳作 『おじいちゃんの家』 野口麻衣子（京都府京都市）

佳作 『二階は海のそこ』 くぼひでき（本名 久保英樹、広島県広島市）

第二回海洋文学大賞特別賞

作家 白石一郎

第二回海洋文学大賞の選考を終えて

曾野綾子選考委員長（小説・ノンフィクション部門）

大岩尚志さんの『長い一日』は、三國沖に漂着して油汚染をもたらしたナホトカ号の事故の裏面史的な記録である。筆者は余人には与えられないぜいたくな資料を得る立場にいたわけで、もう少し独特な視点があれば、もっと鮮烈な記録になったろう。

私は『海人万華鏡』にも関心を持った。切れ切れだという印象は拭えないが、万華鏡とはこういうものか。時々筆者の観察が、どうでもいいような脇の細部に向くところが新鮮でよかった。

どの応募作品にも、整理の悪い部分が残るとすれば、昔より絶対にいい文学を読む量が減っているからだろうと思う。

第二回海洋文学大賞小説・ノンフィクション部門大賞受賞作品

《小説》

長い一日

大岩尚志

昭和二十四年三月二日富山県富山市生まれ。昭和四十六年海上保安大学校卒業、公務員

何故か寝つかれなかった。

錨を降ろしているのに動揺が岩田の身体を左右に揺らしていた。

昨夜正月の祝いを行ってから抜錨し指定海域へと針路を取ったが、台風なみに発達した低気圧が隠岐島の沖合を通過したため、海上暴風警報が発令され、岩田の乗船する巡視船「おき」は夜半に隠岐島に避泊を余儀無くされていた。

岩田尚文は境海上保安部所属の1000トン型巡視船の船長である。昨年の四月に新潟海上保安部の同型船「やひこ」航海長から「おき」船長に発令になり、ようやく馴れてきたところであった。航海科の士官にとって船長職は憧れである。岩田もようやく掴んだ船長職に張り切っていたが、昂りが冷めてくるにつけ反対に責任の度合いの大きさが肩に重くなりつつあった。

ベンチレータから聞こえる風切り音と船体の振れまわりにつれて発するジャイロレピータの金属的な音が、岩田の睡眠を妨げていた。

△何事も起こらなければいいが……………▽

岩田はうつらうつらしている頭の中で思っていた。そのうち、通路を隔てた通信室から漏れてくる音が多くなったような気がした。そして通信士の応答する声があったように思った。しばらく耳を澄ませたが、誰も何も言っていない。

△緊急入域の通報かな▽

岩田は無理やり眼を閉じ眠ろうとした。

しかし平穏な時は二度と訪れなかった。

「船長、海難です。隠岐島の北東百キロメートル位でロシアのタンカーがメーデーを発しています。今本船と五百KCの無線でつながっています」

通信士の安藤がノックもせず飛び込んできた。

先程からの騒がしくなった通信室の状況から完全に覚醒していた岩田は間を置かずに叫んだ。

「それで、どうしたんだ」

「え、はっきり判りませんが、船首脱落、と言っています」

「何だって、船首脱落だって、どういうことだ」

「判りません、だいぶん切迫しているようです。早く来てくれ、と盛んに呼んできています」
通信士の安藤が言った。妙に落ち着いている。

「よし、直ぐに急行する、と言ってやれ。それから船内マイクで、直ちに抜錨準備だ」

「了解」

△この海上暴風警報が出ている最中に海難か、船首脱落だって、船尾部は浮いているのだろうか、乗組員は脱出したのだろうか、とにかく急がなくてはならない▽

岩田は急いで服を着替えながら思った。

上着のボタンがなかなか締まらない。締めるのを諦め、羽織ったまま船橋への階段を急いだ。

ここは隠岐島の島前である。周囲は島で囲まれ絶好の避泊地で殆どうねりは進入してこない。その道前に大きなうねりが進入してきている。岩田の身体がグラッと傾いた。

△これは外海は大時化だぞ▽

これが長い、長い「ナホトカ」号海難の始まりだった。

平成九年一月二日未明、中国上海からロシアアペトロパロフスクに向かっていたロシア船籍タンカー「ナホトカ」号が隠岐島の北北東約百キロメートルの洋上で突然船体が折れ、船尾部は沈没し船首部は内に大量の重油を抱いたまま漂流しはじめた。

年末から年始にかけ日本海のほぼ中央を台風なみの低気圧が通り、海上暴風警報が発令中であった。現場海域は、風速二十メートル以上の風が吹き荒れ、波の高さは十メートルを超える大時化の状態であった。

「ナホトカ」号は総トン数一万一千数トンのタンカーであったが、この大時化のため保針困難となりヒープトゥするため変針した直後のことであった。後部ハウスにいた乗員は救命筏で脱出し、船長を除き三一名全員がヘリコプターや海上保安庁の巡視船に救助された。

しかし、船首部は転覆した状態で大荒れの海を漂い、次第に陸岸に近づきつつあった。

七日早朝、岩田は誰かが扉をノックしているのに気がついた。

時計を見た。午前六時だった。

「どうぞ、入れ」

「船長、失礼します。指令電報です」と航海士補の清水が入ってきた。

岩田はベッドから半身を起こし、天井灯を点灯するよう指示した。

天井灯の蛍光灯の光に反射され電報用紙は真っ白になっていた。しばらく眺めているとようやく眼に入ってきた。

「オキハ、ワカサト協力シN号船首部ノ海岸ヘノ漂着防止措置ヲ実施セヨ」

と記載されていた。わずか一行に満たない電文だった。その意味が理解できた瞬間、身体がグラッと傾き、ベッドの横の壁に打ちつけそうになった。電文の衝撃か、否時化による動揺かどちらかは判